

京都フィロムジカ管弦楽団 第48回定期演奏会

2021年12月26日(日) 文化パーク城陽 プラムホール

※1時20分ごろより、舞台上でプレ・コンサート開催

午後2時開演

高田 三郎／狂詩曲第1番 ～木曾節の主題による～

エドヴァール・グリーグ／劇音楽『ペール・ギュント』第1・第2組曲より抜粋

「イングリクの嘆き」「山の魔王の宮殿にて」「オーセの死」
「朝」「アニトラの踊り」「ペール・ギュントの帰郷」

—休憩—

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー／交響曲第6番 口短調『悲愴』

第1楽章：Adagio 第2楽章：Allegro con grazia 第3楽章：Allegro molto vivace 第4楽章：Adagio lamentoso

京都芸術センター制作支援事業

指揮 滝本 秀信 (たきもと ひでのぶ)

指揮法を伊吹新一氏に師事。国外においてオーケストラ指揮の研鑽を積み、クルト・レーデル（イタリア・レスピーギ音楽院）、リヒャルト・エデリンガー（ウィーン国立音楽大学）、アレクサンドル・ヴェデルニコフ、レオニード・ニコラエフ、イーゴル・シュテツグマン（モスクワ国立音楽院）、アレキサンドル・カントロフ（サンクトペテルブルク・バレエ・シアター）各氏に師事。ロシアへは度々渡り、リムスキー＝コルサコフ『交響組曲シェヘラザード』、チャイコフスキー『交響曲第5番』他を次々に指揮し好評を博す。これまでに、ロシア国立サンクトペテルブルク・シンフォニー・オーケストラ“クラシカ”、同市バレエ・シアター・オーケストラ、ブルガリア国立ブラツァ・フィルハーモニー・オーケストラ、同国パザルジック・フィルハーモニック・オーケストラ、チェコ共和国西ボヘミア交響楽団、京都フィロムジカ管弦楽団、墨染交響楽団、ウィングフィルハーモニー管弦楽団、堺フィルハーモニー交響楽団、あじさい管弦楽団、名古屋工業大学管弦楽団、福井大学交響楽団、大阪市立大学交響楽団、龍谷大学交響楽団、京響市民合唱団、合唱団コールビーポー他、数多くの管弦楽団・吹奏楽団・合唱団の指揮をする。京都吹奏楽団常任指揮者。



お客様へのお願い

- 演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合があります。演奏が終ったように感じても、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。
- 間隔をあけて御着席ください。入退場時も周りの方と間隔をあけてお進みください。
- 常時マスクの着用をお願いいたします。手指のアルコール消毒も積極的におこなってください。
- 「せきエチケット」にご協力ください。せき、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のどあめ」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。
- 演奏中の私語は固くお断りいたします。休憩中も大声での会話をお控えください。
- ブラボーやブーイングなど声を発する感情表現はお控えください。
- 携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、電源を必ずお切りください。
- 補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- 演奏中の客席へのご入場、客席での飲食、喫煙、写真撮影、録音・録画は固くお断りいたします。

京都フィロムジカ管弦楽団

Kyoto Philomusica Orchestra

| | | | | |
|---|--|---|---|--|
| コンサートミストレス 古川 葵※ | ヴァイオリン 赤崎 晃子 澤田 悠那 上田 秀樹・ 古田 直道・ 蒔田 祐太・ 森川 貴之・ | コントラバス 山口 奈央子 日浦 啓全・ 丸山 拓史・ 寺村 有史※ 山田 光洋※ | ファゴット 音 謙一 川瀬 朗 村上 美穂・ | テューバ 北垣 菜々実・ |
| ヴァイオリン 稲葉 道一 小幡 拓也 寺西 里紗 福地 恵美 渡辺 達之輔 大鐘 ひなつ・ 神 千春・ 木村 保威・ 牧平 佳子・ 渡邊 隆寿・ 木下 可哉子※ 高谷 祐介※ 坪庭 乙衣※ 福澤 敬子※ 古川 葵※ | チェロ 内田 裕之 奥村 友梨香 多田 進 西山 峻司 秦野 貴生 高村 誠・ 松浦 悟子・ 岡野 正義※ | フルート/ピッコロ 澤田 智美 永井 沙織 御園生 香 | ホルン 岩井 文香・ 北山 絵里・ 津田 絵梨菜・ 津田 啓吾・ | 打楽器 宇野 均※ 河崎 洋子※ 木村 祐※ ・：団友 ※：客演奏者 |
| | | オーボエ 嶋谷 賢治 西川 紗希 服部 光紀 | トランペット 遠藤 啓輔 北山 武志 | 団長 多田 進 |
| | | クラリネット 植山 彩花 浦野 幸栄 藤田 遥 | トロンボーン 宮下 秀行 湯浦 真太郎 | 事務 西村 浩 |
| | | | バストロンボーン 清水 理紗子・ | 協力 川島 圭太 |

客演コンサートミストレス 古川 葵

京都市立芸術大学卒業。ニース夏期国際音楽アカデミー、ニューヨークサミットミュージックフェスティバル等国内外の講習会を受講。2018年(公財)青山財団助成公演でリサイタルを開催。地元関西のオーケストラや合奏団と共演するなど、ソロや室内楽、オーケストラの客演奏者として精力的に演奏会活動を行う。これまでに外池香代、村瀬理子、梅原ひまり、高木和弘、佐藤一紀の各氏に師事。京都市立芸術大学音楽学部音楽教育研究会「京都子どもの音楽教室」講師。京都新祝祭管弦楽団コンサートマスター。

弦トレーナー 岩井 英樹

名古屋芸術大学卒業。ヴァイオリンを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴァイオリン奏者。

管トレーナー 山崎 雅夫

京都大学卒業。現在、京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC. マクベス、A. ハーゼス、M. アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

| | | | | |
|---------|----------|----------|---------|--------|
| 松村 里香 様 | 鎗本 和弘 様 | 石川 美保子 様 | 豊田 正勝 様 | 匿名の会員様 |
| 杉本 幸子 様 | 西坂 壽美子 様 | 平井 健 様 | 平井 正公 様 | |

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(11月現在)今回演奏会で使用している大太鼓は、友の会の皆様のご支援によりまして、2018年に購入したものです。この場を借りまして、改めて御礼申し上げます。

♪「友の会」会員随時募集中♪

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

【年会費】 1 □ 1,000円

【期間】 ご入会いただいた月より1年間

【特典】 1. 期間内の定期演奏会に、1 □につき1名様を無料ご招待
2. その他演奏活動のご案内
3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ

Tel & Fax 075-605-0123 (西村)

E-mail : tomo@kyotophilo.com

♪プレ・コンサート♪ 1時20分ごろより舞台上にて開催

ハイドン/ディヴェルティメント変ロ長調（木管五重奏用編曲）より

I : Allegro con spirito、 II : Andante quasi Allegretto (“Chorale St. Antoni”)、 III : Rondo Allegretto

フルート:永井 オーボエ:服部 クラリネット:浦野 ファゴット:音 ホルン:津田啓

力強いユニゾンから始まる生き生きとした第1楽章。続く第2楽章の賛美歌「聖アントニーのコラール」は馴染み深い方も多いでしょう。最終楽章はロンドで軽快に終わります。木管五重奏の定番曲で、個性の違う楽器の響きをどうぞお楽しみください。

フラッケンポール/ポップスイート

トロンボーン:清水、宮下、湯浦 テューバ:北垣

アメリカの作曲家 A. フラッケンポール (1924-2019) は主に金管楽器の作品やアレンジで日本でも知られています。彼によるポップスイート（組曲）はいろんな金管楽器の編成によって数多く作曲されていますが、今回はそのうちオリジナルがユーフォニアム2本とテューバ2本のために作曲された作品（この作品は番号なし）をトロンボーン3本とテューバで演奏します。20世紀初頭に流行ったラグタイム音楽による作品で、ロック、リフレイン、ラグの3曲から楽しい雰囲気をお楽しみください。

曲目解説

遠藤 啓輔(トランペット)

高田 三郎/狂詩曲第1番 ～木曾節の主題による～

フィロムジカは11回定期で高田三郎(1913～2000)の出世作『山形民謡によるバラード』を演奏したほか、合唱曲『水のいのち』の管弦楽編曲版の伴奏もしており(京都男声合唱団の第34回演奏会・2016年)、高田にゆかりの深い楽団だと自負する。音楽に対する真摯な姿勢という共通性が、両者を引き寄せているのだと信じる。高田は邦楽を愛好する両親に育てられ、地元名古屋のキリスト教会に通って賛美歌を歌うなど、洋の東西を問わない音楽に恵まれた幼少期を送った。日本語や日本の旋律にこだわった西洋音楽の作曲、という生涯の姿勢はこうして培われたのだろう。その後、東京音楽学校(現在の東京藝大)に進学し、プリングスハイムやクロイツァーといった日本の西洋音楽文化の礎を築いた巨匠の薫陶を受ける。古典だけでなく20世紀の音楽も研究し、中でもドビュッシーに強く惹かれていたという。20代にして音楽家としての成功を収めるが、社会は激動の時代にあった。前述の『山形民謡…』が初演された翌月の1941年12月、日本はアメリカとの戦争に突入したのだ。私生活でも、肉親の死や自身の結婚など毎年のように大きな出来事があった。そのようにして迎えた1945年に、狂詩曲第1番『木曾節』が作曲された。この年の5月に空襲で東京の家を失った高田は、長瀬村(現在の長野県上田市)に疎開し、畑仕事もこなしながら音楽活動をつづけた。長野の人々の温かさや自然の優しさは、大いに心慰められるものだったという。

1945年10月18日と19日、「第9回希望演奏会」が日比谷公会堂にて高田の指揮で開催され、チャイコフスキー『くるみ割り人形』抜粋、ベートーベンの『皇帝』と交響曲第8番とともにこの曲が初演された(当時のタイトルは『信濃路』だった)。敗戦からわずか2ヶ月後の演奏会だが、この『信濃路』(『木曾節』)は、戦争の悲惨さの回想も無ければ、未来への希望を仰々しく謳い上げることも無い。長野に伝わる民謡をオーケストラで淡々と歌った作品だが、傷ついた人々を慰めるのは、こうした懐かしさのある音楽だったのかもしれない。

弦楽器とトライアングルによる伴奏の中を、篠笛のような旋律がゆったりと渡っていく幻想的な序奏を経て、主部では誰もが聞いたことがある陽気な民謡が生き生きと演奏される。「狂詩曲(ラプソディー-Rhapsody)」とは、

ソナタやロンドなどとは違って形式の枠を持たない自由な音楽のことであり、この作品も、曲の雰囲気は唐突に変化する面白さが魅力の一つである。同じ主題が、テンポの変化や転調の妙味によって色合いを変えており、演奏時間わずか5分の小品に膨大な音楽的喜びが濃縮されている。オーケストレーションも、特に管楽器の色彩感が秀逸だ。高田は音楽学校時代に副科でホルンを吹いていて管楽器に精通していたのに加え、ドビュッシーの簡潔かつ効果的な音楽を研究した成果がここに現れているのだろう。

なお、クロイツァー先生は、高田の作品を「Nordisch(北方的)」と評した。北欧音楽愛好者を自認する僕は、淡々としたメロディーが、わずかな変化で悪魔的恐ろしさを備えた音楽へと展開してしまう豹変ぶりが、「北方的音楽」の特徴の一つだと考える。この『木曾節』にも、陽気な民謡が、底なし沼のような恐ろしさを持ったフーガに豹変する瞬間がある。あるいはこの場面は、戦争や肉親の死の衝撃のフラッシュバックかもしれない。

グリーグ／劇音楽『ペール・ギュント』第1組曲・第2組曲より抜粋

戯曲『ペール・ギュント Peer Gynt』は、近代劇の父とも呼ばれるノルウェーの劇作家イブセン(Henrik Ibsen 1828～1906)が1866年に書いた作品である。イブセンはこの上演にあたって、グリーグ(Edvard Grieg 1843～1907)に劇音楽の作曲を依頼した(1874年)。当時グリーグは31歳の青年であったが、ピアノ協奏曲の成功によってノルウェーにおける名声が高まっていた。上演時間4時間を超えたとされる『ペール・ギュント』音楽劇の初演は大成功で(1876年)、この劇音楽はグリーグの代表作となった。グリーグは、膨大な数の音楽の一部を抜粋して組曲を編曲するなど、生涯にわたってこの作品と向き合い続けた。

本日は、2セットある組曲の中から6曲を抜粋し、イブセンのストーリー(毛利 2006)に沿ってお届けしたい。以下では物語の要約と共にグリーグの音楽を紹介するが、ノルウェー語の人名は様々に片仮名表記されてどれが正しいのか分からないので、括弧書きで複数の読みを示した。

ノルウェーの山村で生活していたギュント家はもともと裕福だったが、大酒飲みが当主になって一代で財産を食いつぶしてしまった。彼の妻オーセ(Åse オーゼ)と幼子ペールは、貧困と家庭内暴力を耐え忍ぶために、肩を寄せ合って空想の話を語り合った。そのため父の死後、ペールは空想好きですぐに心変わりするほら吹きに育っており、村人たちに嘲笑されては喧嘩に明け暮れる日々を送った。

ペールは20歳のとき、金持ちの跡取り娘・イングリ(Ingrid イングリッド)の結婚式に乱入し、大騒動を巻き起こした挙句、花嫁イングリを拉致して山へ逃亡した。もっとも、イングリにとってこの結婚は望まないもので、彼女は式の最中も部屋に閉じこもって抵抗していた。イングリはペールに連れ出された瞬間、喜んだかもしれない。ところが、心変わりしたペールはすぐにイングリに飽きてしまい、まだ花嫁衣装を着たまの彼女に罵詈雑言を浴びせ、山に置き去りにして去ってしまう。修羅場と化した結婚式の阿鼻叫喚、地獄から地獄に突き落とされたイングリへの慟哭、そして非情な運命の打撃を、激情溢れる音楽でグリーグは描き出した(『イングリへの嘆き』)。

こうして犯罪者となったペールは山中を逃げ回るが、夜になってトロールの王女に出会う。トロールとは、北欧の民話に広く登場する精霊である。人をだましたり家畜を病気にしたりする恐ろしい存在で、山や森を住みかにして夜にだけ活動するという。その姿は、毛むくじゃらで長い鼻と尾を持った醜いものとされている(熊沢 2014)。にもかかわらずイブセンは、トロールと人間は似た者同士と喝破したうえで、両者の違いを敢えて言うなら「トロールはおのれ自らに満足する」のに対し「人間はおのれ自らに徹しようとする」と論じている。

ペールはトロールの王女を誘惑して結婚の約束をし、その王城に乗り込む。トロールの王は遺伝的多様性を得るためにペールを婿に迎え、婚礼の饗宴でトロールたちが踊り狂う。グリーグは『山の魔王の宮殿にて』で、ペールが「醜さの極み」「猿がフンドシして豚みたいに駆けまわっている」と酷評したトロールたちの踊りを、グロテスクに描いた。そして、ペールは心変わりして婿入りを拒否し、怒り狂ったトロールたちに八つ裂きにされそうになる。しかし突然、城が崩れ落ち、ペールは命拾いする。村娘のソールヴェイ(Solveig ソルヴェイグ)が、

ペールの身を案じて教会の鐘を鳴らしたおかげだ。ソールヴェイは移住者で、村人からよそ者扱いされていた。閉鎖的なムラ社会でアウトサイダーとして生きる辛さを共有する故か、彼女はペールの数少ない理解者であった。

そしてソールヴェイと共にペールの身を案じていた母オーセは、逃亡した息子の罪を背負って家財を没収され、極貧の晩年を送っていた。寒い雪の日にペールはこっそり帰ってきて、死の床にあるオーセに、聖人が住む天国の城に招かれる空想の物語を聞かせる。グリーグは『**オーセの死**』を、弦楽のみのオーケストラで静謐に描いた。

故郷を捨てて旅に出たペールは、アフリカ黒人をアメリカに送り込む奴隷貿易で財を成す。しかしこうした邪悪なビジネスは商売仲間も悪人であり、北アフリカのモロッコに滞在中の夜中、ペールは船と財産を奪われてしまう。しかし、したたかなペールは再起する決意を固め、砂漠の岩場で清々しく朝を迎える。ペールは「朝、ああ、それは黄金のとき。人は安らかさを感じ、勇気があふれる。なんて静かなんだ！」と感嘆する。グリーグが書いた『**朝**』の音楽は、刻々と変化する朝の色彩とともに、未来への希望に溢れたペールの心情をも表現する。

こうして次なる一步を踏み出したペールは、幸運にも宝石や馬を獲得し、さらに、アラビアの部族長に預言者だと間違えられて厚遇を受ける。饗宴の席でペールは、アニトラ(Anitra)という女の不細工な容姿と魅惑的な踊りのギャップに惹かれ、彼女に夢中になる。アニトラは言葉巧みにペールをその気にさせて彼から宝石をもらい受けると、馬をも奪って走り去ってしまう。グリーグは、ペールを手玉に取った『**アニトラの踊り**』を、弦楽器とトライアングルだけの簡潔な音色で魔性豊かに描き出した。

ペールはその後も、老境に至るまで放浪を続け、金鉱を掘り当てて得た富を元手に船をチャーターし、故郷ノルウェーに向かって出帆する。しかし夜の海で大嵐に見舞われる。帆が吹き飛び、マストが折れ、ついに岩礁にぶつかって難破する。ペールは他の船員を海に突き落として定員一人の救命ボートを独占し、九死に一生を得る。グリーグは『**ペール・ギュントの帰郷**』の音楽で、緻密なオーケストレーションと強弱の対比、そして執拗な反復によって、荒れ狂う海と、じわじわと迫りくる破局への恐怖を見事に描き出した。

故郷にたどり着いた老ペールは、自分の人生が「おのれ自らに満足する」トロール的なものだったのか、「おのれ自らに徹しようとする」人間的なものだったのか、ということに悩まされる。その結論が出ないまま家に戻ってみると、ソールヴェイがまだペールの帰りを待っていた。ソールヴェイは、ゲーテの『ファウスト』における「永遠なる女性」なのだろうか。ペールは、自分でも評価を下せなかった「おのれ」を、ソールヴェイにすべて受け入れてもらうことで救済される。

チャイコフスキー／交響曲第6番 口短調 作品74 『悲愴』

本日の前半プログラム2曲はいずれも、作曲者が30歳そこそこの青年時代に書いた作品である。一転して後半のチャイコフスキー(Пётр Ильич Чайковский 1840~1893)は、死の1週間前に作曲者の指揮で初演された、まさに最後の作品だ。チャイコフスキーはこの作品・交響曲第6番を気に入っていたようだ。彼は交響曲第5番については「大げさに飾った色彩」「こしらえもの的な不誠実さ」と辛辣な自己批判をする一方、第6番は「私のすべての作品の中で最良のものだ」と満足していたという。どちらも正鵠を射た評価だ。ロシアで生まれ育ちスラヴの民謡を積極的に作品に取り入れたチャイコフスキーだが、交響曲を書く際にはベートーベンなどドイツ語圏の作曲家によって確立された形式に則ろうとしている。第5番以前の交響曲はその結果、感情の自由な発露が抑えられて窮屈に感じる。しかし死を前にして書いた第6番は開き直ったのか、形式の制約を換骨奪胎し、音楽が奔放に暴れ回る。オーケストレーションも見事だ。楽器編成は簡潔で、特殊楽器はピッコロのみ、打楽器の使用も抑制的だが、楽器自体の音色の魅力が、音楽の内容と深く結びついて効果を上げている。

遅いテンポで始まる**第1楽章**の序盤は単なる序奏を超えた存在感を放っており、まるで第2楽章に置かれることが多いテンポの遅い楽章(緩徐楽章)を先に聴いているかのようだ。そして楽章全体を通して、遅く重々しい音楽と暴力的に疾走する音楽とが巨大なうねりを持って激しく入れ替わる。交響曲の第1楽章と第2楽章を

坩堝(るつぼ)に入れて、地獄の業火の熱で溶かし合わせた楽章とでも言えようか。そしてオーケストレーションも冴えている。冒頭はファゴットの朴訥とした独白から始まるが、音楽が進むにつれてクラリネットの流麗な歌が主役に入れ替わる。ファゴットという楽器が内省的・思索的な趣を持っているのに対し、クラリネットは外交的で天真爛漫な印象を与える。これら対照的な性格を持った2つの楽器のソロが、実は同じキャラクターの陰陽2面を示していたということが、楽章の中盤になって確信犯的に示される。ひとつのフレーズをこの2人が分担して吹くのだ(譜例1)。楽器の役割分担だけで、音楽のストーリー展開に深みを与えている。また、弱音器を装着(con sordini)して音の輪郭をぼやかした弦楽器が効果的に使われる。藤岡幸夫はチャイコフスキーを「長調の旋律で悲しい音楽が書ける」と絶賛するが(藤岡 2020)、ここ譜例2はその典型だ。まるで夢幻の世界から音が届いてくるような印象で、悲劇的な現実を描いた場面と残酷なまでの対比になる。そしてこれをよく見ると、小節の中途からメロディーが始まっていることに気付くが、これはこの楽章の全体的な特徴と言える。伴奏音型は小節線を境に変化するので、メロディーとの噛み合わせに混乱をきたす場面が生じ、迷宮をさまようような不安を聴衆に与える。楽章の最後になって、死者を悼むような聖歌が管楽器によって歌われるとき、ようやく小節冒頭からメロディーが始まる安定感を獲得する(譜例3)。荒れ狂う葛藤の中を迷い生きた主人公が、死によってやっと安息を得たかのような。



譜例1 第1楽章 159小節目付近



譜例2 第1楽章 89小節目付近



譜例3 第1楽章 336小節目付近

第1楽章の中にアレグロ楽章と緩徐楽章を一体化したのとは逆に、この曲ではスケルツォ楽章の要素を第2楽章と第3楽章に分割したように思われる。スケルツォとはベートーベンが得意にした音楽形式で、舞曲風のリズムを持ちながらも、攻撃的な迫力を備えたものである。思索的に交響曲を聴き進めてきた聴衆の脳をリフレッシュさせる効果を持つ。そして管見の限り、チャイコフスキーはスケルツォを苦手にしてきたように思われる。舞曲も、攻撃的な音楽も、ともに彼の得意とするところだが、両者を兼ね備えた音楽は難しかったようだ。チャイコフスキーの後期の交響曲は、ピッツィカートで演奏するという裏技を使ったり(第4番)、スケルツォではなくワルツを用いたりする(第5番)などして、苦手のスケルツォ楽章を克服した。そして第6番は、スケルツォの舞曲性と攻撃性を2つの楽章に割り振ることで解決したように思われる。

第2楽章は舞曲性を担当する楽章で、ロシア民謡によく見られるという5拍子で書かれている。

ただし、すべての小節が2+3に分割可能で(譜例

4)、典雅な3拍子のワルツが1拍をどこかへ置き

忘れてしまったかのような、愛らしい哀しさを伴う。バーンスタインはこの楽章を、「これはチャイコフスキーが書いた最も美しいバレエ音楽なんだ」「星の降る夜の物語だ」と評したという(ヴァーゲラント 1989)。3部形式で、中間部は、低弦とティンパニによる5拍子の伴奏が運命の打撃のように重々しく響く。

つづく**第3楽章**は、攻撃性を担当する行進曲風の音楽だ。悪戯好きの小人たちがチョコチョコと歩くような愛らしい始まり方をするが、それがいつの間にか巨人たちが闊歩するような音楽へとグロテスクに成長する。この楽章にのみシンバルと大太鼓が加えられ、大地を揺さぶるような破壊力を増強する。



譜例4 第2楽章 17小節目付近

第4楽章は、終楽章としては珍しい遅いテンポの音楽で、慟哭した挙句、救いの無い暗鬱の底へと静かに消えていく。しかも、ただ単に悲しいだけの音楽ではない。3拍子で書かれていることもあって、ワルツのような軽やかさと典雅さが漂っている。まるで、死にゆく人が朦朧とした夢の中で踊っているようだ。オーケストレーションも、弦楽器だけで始まる冒頭から



譜例 5 第4楽章冒頭



譜例 6 第4楽章G付近

更なる冴えを見せる。弦楽器の各パートが主旋律の一音符ずつを交互に弾くという工夫がなされているのだ(譜例5)。音響がやや不鮮明になるため、正体不明の敵と対峙しているかのような不安をいっそう掻き立てられることになる。この旋律線は再現部ではっきりとした形を取るため(譜例6)、犯人の姿が終盤で明かされるような推理小説的効果ももたらす。冒頭の弦楽器を受け継ぐ木管の旋律も傑作的オーケストレーションだ。フルート3人とファゴット2人の合計5人がユニゾン(同じメロディーを複数人で同時に演奏すること)で歌うのだ。多人数でのユニゾンは、物理的に広い範囲から音が立ち上がるためか、荒涼とした原野に一本の音が吹き抜けて行くかのような寂寥感がある。さらに楽章終盤の、救いを求めて叫び声をあげるような悲痛なクライマックスでは、心中に巣食う悪魔の叫びのようにホルンが特殊奏法を使って金切り声を上げる。その直後、梵鐘のように静かに銅鑼が鳴るが、ここが死を象徴していることは明白であろう。トロンボーンが死者を悼む葬送の音楽を奏でると、弦楽器とファゴットの音響が、暗鬱とした静寂の中へ消えていく。

このように個性に溢れた各楽章は、リズムの共通性によって一つに結ばれている。譜例7~10で示したように、まるで不整脈のような混乱したリズム(シンコペーション)が各楽章に頻出するのだ。生きることの苦しさを象徴するようなこのシンコペーションは、全曲の最後で主役となる。死に際して乱れた心臓の拍動が、ついに静止するようにしてこの曲が閉じられるのである(譜例10)。



譜例 7 第1楽章M付近



譜例 8 第2楽章C直前



譜例 9 第3楽章3小節目付近



譜例 10 第4楽章末尾近く

この曲は、作曲者の死にまつわる不思議な歴史を経ていることでも知られる。1893年の初演は、既に寒さが厳しくなっている10月28日にサンクトペテルブルクで行われた。その時は表題が付けられていなかったが、チャイコフスキーは『Pathétique(パテティック:心を揺さぶるような情熱のこもった悲しさ、を意味するフランス語)』の表題を考えていたという(なお、「悲愴」の語には「悲しい」の意味しかない。同じ読み「悲壮」と訳されていた方がPathétiqueの語感に近かったのではないかと邪推する)。そして初演のわずか9日後の11月6日にチャイコフスキーが急死。11月18日に『悲愴交響曲』が再演された。こうした初演前後の経緯から、チャイコフスキーの死因は当時流行していたコレラによるものか、それとも自殺なのか、の議論がある。少なくとも音楽を素直に見る限り、チャイコフスキーは死を意識していたと思われる。前述の文中で指摘した他にも、バッハの宗教音楽からの影響を指摘されるなど、死や宗教に関する膨大な量のメッセージが盛り込まれていると言われている。そしてここからは僕個人の勝手な憶測にすぎないが、『悲愴交響曲』にはベルリオーズの

『幻想交響曲』からの影響があり、それが作品理解のヒントになると邪推する。たとえば『悲愴』の第2楽章のワルツは、舞踏会で主人公が孤独感を深める『幻想』の第2楽章を思わせる。そうすると『幻想』の「断頭台への行進」が、『悲愴』の第3楽章に相当しよう。「悲愴」な交響曲に明るいマーチがあるのも、行進の行き着く先が刑場だと分かれば腑に落ちる。賑やかで楽しげなのも、死に行く者に罵声を浴びせる無慈悲な群衆の嘲笑を表現しているのだろう。そうすると終楽章は、『幻想』も『悲愴』も、主人公の刑死やその後の魂の行方を描いたことになるが、こちらは残酷なまでに正反対な描かれ方だ。『幻想』では主人公が悪魔たちと狂乱する地獄ライフが楽しく描かれる。対して『悲愴』は、地獄へ落ちることも無ければ、ましてや天国に転生することも無く、乱れた心臓の拍動が止まると同時にすべてが無に帰すのである。地獄に落ちるより残酷な終結だ。チャイコフスキーが、死を、救われることなく消えてしまうものとして描いたことが、より鮮明に見えてくる。

晩年のチャイコフスキーは、皇帝からの年金で経済的に安定し、指揮者としての活動も軌道に乗って各国で活躍し尊敬を集めていた。こうした絶頂期にある人間が死を意識するものだろうか？ そのため、同性愛がらみの問題が原因で自殺した、あるいは自殺を強要された、とする説もある。ただし、チャイコフスキーは結婚直後の1877年にも自殺未遂を起こしており、外見上の成功と自身の満足は必ずしも一致するものではない。人間は誰しも心理の奥底に、外からは見えない、当人にすら分からない暗く悲しい感情を隠し持っているものだろう。それと対峙することは、死に直結しかねない危険なことだ。チャイコフスキーはその危険を冒して自身の内面と果敢に戦い、文字通り命を懸けてこの『悲愴交響曲』を勝ち取ってきたのではないだろうか。僕たちにとっても、『悲愴交響曲』を聴くということは、自分自身との孤独な戦いに挑むという行為なのかもしれない。

【音楽事典類・スコア序文以外の参考文献】市川利次・平尾民子 1995『人物書誌体系 31 高田三郎』紀伊國屋書店／高田三郎 1996『来し方』音楽之友社／佐野智子 2015『高田三郎 祈りの音楽』音楽之友社／毛利三彌(訳) 2006『パール・ギュント』論創社／熊沢里美 2014『だれも知らないムーミン谷』朝日出版社／藤岡幸夫 2020『音楽はお好きですか?』敬文社／ヴィーゲランド 1989『コンサートは始まる 小澤征爾とボストン交響楽団』音楽之友社

♪ 新入団員随時募集中 ♪

～私たちと一緒に演奏しませんか？ まずはお気軽に見学にお越しください。 団員一同、お待ちしております。～

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでます。「一緒に演奏したい！」という皆様のご参加をお待ちしています。遠方からのご参加も歓迎します。関西地区以外の方々もご興味があればぜひご連絡ください！

<募集パート> ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス (**ヴァイオリン・ヴィオラ急募!**)

ファゴット・ホルン (**ホルン急募!**)・トランペット・打楽器 ※打楽器は、諸条件について要相談
(参加資格) 特にありませんが練習に出席できること。学生の参加も歓迎します。

(練習日時) 原則日曜日(午後1～5時)、春と秋に合宿練習(現在は感染症対策のため休止中)

(練習場所) 主に京都市内、そのほか大津市、長岡京市など近隣都市の施設

(諸費用) 団費3000円/月(学生は1000円)、演奏会参加費など

※遠距離割引、学生割引、家族割引などあり(ご相談ください)

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail: recruit@kyotophilos.com

第49回定期演奏会 2022年6月19日(日) 長岡京記念文化会館 指揮: 柴愛
エルガー: 序曲『フロワサール』/グノー: 交響曲第2番/ボロディン: 交響曲第1番 (予定)

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ <https://www.kyotophilos.com/index.shtml>